

## 奥会津の文化を伝える上映会を開催

### NPO法人いろいろ初の試みに22名が参加

2019年4月28日、東京・墨田区にあるレンタルスペース「ウラダナ」で、当法人初となる映画上映会を開催しました。プログラムは、福島県南会津町田島地区の針生（はりう）で撮影された記録映画『奥会津の木地師』（民族文化映像研究所制作、1976年）です。私たちのふだんの活動地である福島県南会津町であることから、この地域の文化を東京の方に知っていただくきっかけとなるよう、選んでみました。

### 南会津の木地師

木地師とは、ロクロを使ってお椀やお盆をつくる木工職人のこと。かつては福島県の会津地方の全域に分布し、山から山へ移動しながら、木を切り出して生活していました。この映像は、昭和初期まで伝わっていたそれら木地師の仕事ぶりを、およそ50年ぶりに再現して収録した、たいへんな力作です。

映画の冒頭、林のなかで始まったのは、木地屋

敷（木地小屋）を建てるシーン。木地師はこの小屋で数年生活しては、また別の場所へ移動していききました。撮影には地元の農家の方も協力されたそうです。木地師の集団生活が失われて半世紀が過ぎても、こうした手仕事ができる人たちがたくさんいらしたのですね！

お椀をつくる作業は、「これぞ」と見きわめたブナの木を切り倒すところから始まります。そして、切り倒された幹からお椀の原型（荒型）を切り出し、小屋へ持ち帰ります。小屋では、お椀の外側と内側をだまかに削り出し、形を整えていきます。荒型を切り出すのは男性の仕事、小屋で成型するのは女性の仕事でした。

お椀の形がおおまかにできあがったら、いよいよロクロの出番。いま、ロクロというと、「足元に置いた円盤を自分で回して、器の形を整えて……」という焼物づくりの光景を想像しますが、木工のロクロはまったく異なるものでした。

まず、作業をするのは二人一組。一人（映像では女性）はロクロを回す役、もう一人（映像では男性）はお椀を削る役です。お椀はロクロの軸の先端に取り付け、紐でロクロを引っ張り、軸を高速回転させます。そして、削り役がお椀に刃物を当てて滑らかに仕上げていくのです。

このシーンには、映画を企画・撮影し、自らナレーションを務めた姫田忠義氏も、「私は驚きました！ 私が想像していたよりはるかに速い速さで、



ロクロが回転するのです」と、思わず感嘆の声を漏らしていました。映画をご覧になった皆さまも同じ思いをされたことと思います。

すでに映画製作から43年が経ち、再現された仕事の日々は、90年以上の昔に過ぎ去ってしまいました。当時の道具は、今では資料として保存されているのみです（余談ですが、かつて南会津町糸沢の「奥会津博物館」にて、木地師の道具や再現された木地小屋を見たことがあり、今回の上映会でそのときの感動がよみがえりました！）

しかしいまでも会津には、木地師の伝統を受け継ぐ木工職人さんがいらっしゃいます。今後は木地師をテーマに、南会津を旅してみるのも楽しそうだなと、上映後に感じた次第です。

## 会場は築90年の長屋

今回の上映会は、墨田区京島にある「ウラダナ」のお世話になりました。ウラダナは、二軒長屋の左側の1軒を再生したレンタルスペース。

管理する角田晴美さんは、画家、不動産屋さんとして活躍しながら、地元墨田区の歴史ある建物を活かして保存することに取り組み、人と町を大切にされています。90年前まで伝えられていた技術の再現映像を、およそ築90年の空間の中で鑑賞することで、不思議な縁を感じました。

なお、上映会に先立ち、NPO法人いろいろの活動をスライド投影により紹介させていただきました。また、上映会後には参加者どうしでディスカッション



下町の路地裏に残された「ウラダナ」

ンできる時間を設けたところ、「前時代の技術や知恵の継承」「地方のあり方」などをテーマに、2時間近くにわたって白熱した意見交換がなされました。今回はじめて当法人のイベントにご参加いただいた方も多く、新たなつながりができたことを嬉しく思いました。



## 恒例の「茅刈りツアー」を「茅刈りワークショップ」に模様替え

2019年10月26日・27日に、南会津町館岩地区の水引集落にて、恒例となる茅刈りを開催しました。今回からイベント名称を「茅刈りワークショップ」に変更。参加者の方に、より主体的に関わっていただき、「みんなでつくるイベント」にしたいという思いを込めたものです。

今回は関東・東北各地から17名の方にご参加いただき、2日間で約7畝の茅を刈り取ることができました。この茅が、次年度以降の屋根葺きで使われます。

茅刈りは来年以降も継続する予定です。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

